キッといひて人家の門に居置て、常の用ひ水とするところあり、老人に問ふに此キッむかしはおほかた家毎に門に居置くならひなりつるが、近きころやうやく大瓶などを用ふる事となり又其をだに置かぬ家も多くなりて、今はキッある家はまれなれば其名だに知らぬ人はたおほかめりといへり、これ古き東語にてきつにはめなでの歌はもしくは鶏をそのキッてふ器の水中にうちはめむといへるにはあらじかといへり　おのれ又後に、秋田人高階貞房に問ふにもはら篤胤の云へるに同じ、猶その後おくの國人に問ひ試るに有り無し知りしらずとりく〳〵なる中に、所によりては尋常のごとく板にて合せ造れるをキッといふともいへり、キッは木櫃の約りたる言なるべし、キもヒも共にイの韻ある言なれば、ヒを省きていはむ事ことに例多し、板にて造れるをいふは名の轉れるなり、予さきに下野の二荒路にても家の門に板にて造れる水槽を居置たるを見あたりて、其名をとふに水ためにてきふらふといらへて、はかばかしき名はきこえざりこはいと希しき説なるにつきてなほ考ふるに、今も鶏の宵鳴するを凶みてしかさせじとするにはその鶏の腹をしばく〳〵水に漬し冷せばその事止むものなり　また雌鶏の卵を孕さむとて塒に在を、止させむとするにも然すれば止むるものなり、そは腹の熱をさます術なりとぞ、宵鳴を止むるも同じことわりなるべし　女その鶏のまたしも宵鳴せむことを悪嫌て明旦きつの水に打沒入むといへるなり　水などにハメ、ハムルなどいふは、今の世の俗言のごとくきこゆれどさにあらず、萬葉十七に、鶏の鳴く關谷に宇知波米底云々、土佐日記に船中の事を記せる文に、ゆくりなく風ふきて、こげどもく〳〵しりへしぞきにしぞきて、ほとく〳〵うちはめつべし云々、鏡をたいまつるとて海にうちはめつれば云々などなほありさてくたかけは腐鶏にてクタのタ清むこそのくたはくさるといふとおほかた同じほどの事を通はしいへる詞にて、字治拾遺物語に男の詞に、ものもおぼえぬくさり女といへるもくたり女といはむに同じいひざまなるを、このくだかけと云へるにおもひ合すべし、さてそのクタとクサと通はしたる例は、まづクタは萬葉集にうの花を令腐霖雨のなどみえて、くた腐字を書り、此詞後の世にもきこえたる詞なり、また萬葉集に豊後のくたみ山を杵綱山と書るは、杵字をくたに用ひたるにて風土記にはその地名のくたみを球覃と書て、もとは臭泉といへるを訛りたる由みえたり、くさの意はことなれどこれもくさとくたとかよはしいへる例なり、又繼體紀に爛をクタルまたタヾルと兩かたに訓り、このクタルもクサルと通はしたる古言にてクタリ、クタルなど活く詞ときこえたり、但しくたすといへる詞の中には損なふ意に轉したりときこゆるもあり、此詞の委しき考は別にいふべし、さて奥義抄くたかけの條に、くたはくつといへるにてくつにはとりとよめるにやとみえたり、此文きゝとりがたし、おもふにくつは原本にくちと書たるを、くつとまがへて誤寫せるにはあらざるか、しからば杵の意なるべければおのれが考よりもいとはやくいはれたるを舊説にそのくつを塵芥の意にとりていへる説はうけがたし、又墓嚢抄にくたかけの事を、常ニ聞ク處ハ狐ニクラハレテ、クツ庭鳥トイフ云々、又證本ニハ、クロカケト書タリ、烏鶏ナリト云々異説區ナルベシ」といひ、また近き頃百濟鶏なりなどいへる説もきこゆれど、論ふにも足らずこほと、ぎすなどいへると同趣なるいひざまなり萬葉集八卷十卷などにもありつるは夫を歸し遣りつるなり、一首の意は、夜明なばキッの水にうち入なましかはよめるが見えたり　せなをやりつるは夫を歸し遣りつるなり、一首の意は、夜明なばキッの水にうち入なまし腐鶏よ汝が宵鳴したるを曉がたぞとおもひてまだ夜ふかきに夫を歸しやりつるがくやしく悲しきよ、またの夜よりはしか宵鳴はせさせじとなり　古今和歌六帖に「夏の夜のこもちがらすのたからかに夜ぶかく鳴て君をやりつる」とよめるこゝろばえ、おもひ合すべし、舊説にきつにはめなでは狐に食せむとなりといへれど、女情にいと人なれぬ夜の神なる、狐にしも夜の明くるなまちてその鶏を食せむとおもひいふべきにはあらざるをや、夫木抄に「人も見ばあなしらく〳〵し老狐いとどもひるのまじらひなせそ」古事記八千矛神の沼河比賣を婚にいでましし時の御歌に、阿遠夜麻邇奴延波那伎怒都登理岐藝斯波登與牟爾波那登理迦那波那久宇禮多久母那久那留登理加許能登理母宇知夜米許世泥、この終の句打腦めむと乞望ふ意なりと鈴屋翁いはれたり、又和泉式部集に、とりのこゑにはからられていそきいでてにくかりつれば、ころしつとてはねにふみをつけて給へれば「いかゞとはわれこそおもへあさなく〳〵猶きかせつるとりをころせば、これら男女の間ばかへさまながらおのづから似たるこゝろばえなり　此歌も上にみえたるくはここにもとよめると同じくひなびたる女の口つきに眞情のあらはれていとあはれにぞ聞ゆるかし

○此歌の初句奥義抄に我宿のとあり、當時然書たる本もありしなるべし、夜も明ばといへるよりは情あさくおとりてきこゆ、二の句きつにを或書に此書名忘れたり花鳥物語に、きつねはめなでとありと云へり、こはねはにの誤か、又さかしらにしか書たるにもあるべし、いづれにもこのところにては狐とはいふべきにあらず、又はめなんは諸本のごとくはめなでにてはめずしてといふ詞の意にきこえて古語の例にかなひがたく古今集に「見るめなき我身をうらとしられねばやかれなであまの足たゆくる、伊勢集に、見もはてゞ空にきえなでかざりなく、竹取物語の文に、ぬれたるきぬをだにぬきかへなでなむたちまうで來つる、此ほかなほ多かりさては歌もと、のひがたくおもはる、に、奥義抄の一本にもはめなんと書るがみえ、眞名本に爲食と書るもはめなんといふ假字に塡たる書ざまなるがうへに、おのが見たる一本の中に、はめなんと書り、義かなひてきこゆればはめなんとあるを正しからむとして採れるなり、古の假字のさま上の字より連ね書るにんとてとはことにまぎらはしく見ゆれば、はやくより書誤れるかたの本の多きなるべし　但さばかり古き寫巻にもあらざれば、その本書は普通のごとくはめなんと連れ書りけるを、其んをてと見誤れるわざならむもしらず、然あらむにはこれもむかし誤りけむ趣を、かへさまにおもひ准ふべし　屋代弘賢主のもたれたる古筆の本にははめな手と書りとぞ、こは牟を草の手に牟と書けるを手の草書に見なしてあやまりたるにもやあらむ

○おのれさきに伊勢物語の中に見えたる事どもこれかれ考そめたる下書のありつるを、あるふる翁のき、およびて平田篤胤を中人にて乞へるまゝに見せたる中に、件のきつにはめなむの説もありつるを其をかへして後二年ばかり經て、文化十年にかの翁伊勢物語の異本どもを校へ合せ奥にいさゝか考説を書加へて板本にしたるを、篤胤におくり